

サツマイモ遺伝資源の思い出

農研機構 生物機能利用研究部門 部門長

よしなが
吉永

まさる
優

九州のサツマイモ育種の現場を離れて7年。多くの方と品種開発に携わった経験は私のかげがえのない財産になっている。サツマイモは遺伝的な多様性が大きい作物で、用途ごとに交配と選抜を繰り返し、多様な子孫が生まれ、個性豊かな新品種を作り出すことができる。サツマイモの育種は可能性に満ちており、やりがいがあった。

その育種の基盤になるものは、先人の方々から受け継がれる遺伝資源であった。日本では大正時代にサツマイモの組織的な育種が始まったが、当時からの在来品種、海外から収集した品種、新品種や途中で育成を中止した系統など、約2,000種類が含まれていた。それらを毎年畑で栽培し、間違いないように栄養体を保存する業務は単調に感じることもあったが、今となっては懐かしい。いもの収穫機に追い立てられながら特性調査を繰り返す中で、形態的特性に目を奪われたり、原産地や来歴等に思いをめぐらせたりしていた。

遺伝資源の重要性は、新品種の系譜を見ればよくわかる。例えばコピー用紙2枚にわたる「べにはるか」の系譜を見ると、母親の「九州121号」とその両親（「九系58」、「九系61」）は、九州の育成地が食用の育種に力を入れ始めた1970年代の交配に由来す

る。これらを母本にすると、いもの外観、皮色、収量性の良好な子孫が比較的多く出現したが、食味や肉色のさらなる改良が必要であった。一方、父親の「春こがね」は、関東の育成地が開発した「ベニアズマ」を親とする良食味で多収の品種であった。まさに「べにはるか」は、九州と関東の遺伝資源のいいとこ取りをして生まれた最強の品種と言えるだろう。また、系譜を遡ると、「コガネセンガン」等の優良品種、野生種の血が入ったセンチュウ抵抗性系統、遠縁の海外品種、明治時代の在来品種など、遺伝資源約100品種・系統の名前が出てくる。そこには、それぞれの時代に優良品種の育成を目指して試行錯誤と努力を重ねた先人の方々の姿が見えるような気がした。

最後に海外での思い出を一つ。カリブ諸島で遺伝資源を探索していた時、コロンブスが新大陸に到達した頃のサツマイモが西インド大学にあると聞いた。実物を見る絶好の機会を逃してしまったが、古い時代のサツマイモの存在には心躍るものがあった。熱帯や亜熱帯地域に比べると日本でのサツマイモの保存には手間もコストもかかる。それでも皆で力を合わせてサツマイモの遺伝資源を大切に伝えていってほしい。育種研究のさらなる発展とともに。